

高病原性鳥インフルエンザの防疫対策を強化

2月16日に京都府精華町(けいはんな記念公園)で発見された死亡野鳥(ハヤブサ)が、府のA型インフルエンザの簡易検査で陽性と判定されたことを受け、当センターでは、家畜防疫員等で構成する「防疫チーム会議」を開催しました。

会議では、鶏舎へのウイルス侵入防止のため、鶏舎敷地全面の消毒を毎日行い、また、畜舎に設置済みの車輛消毒施設だけではなく、本館への進入路に消毒マットを新たに敷設し全車輛の消毒を行うなど、防疫対策を強化しました。



噴霧装置を運搬車の後部に設置し手動と併わせて消毒液を噴霧（鶏舎敷地）



防水シートの上に毛布などを敷き板で押さえた簡易消毒マットを設置（本館侵入路）

畜産センター

広域堆肥センターに畜産センター方式の脱臭装置が完成

南丹地域の広域堆肥センターでは、牛ふんや豚ふんを堆肥化する際に発生する臭気を軽減するため、畜産センターが開発した脱臭装置の設置工事が進められてきました。この度、設置工事が終了し、畜産センター職員が、脱臭槽内に臭気を分解する種菌（硝化細菌・脱窒細菌）の植え付け作業を行いました。

本装置による臭気軽減効果に寄せられる期待は大きく、畜産センターは、今後、脱臭効果の確認を行うとともに装置の運転指導を継続的に行います。



完成した脱臭装置
(縦×横×高さ：5 m×2.1 m×2 m)

樹木チップ等を満たした脱臭槽内に
種菌を植え付ける作業

家畜伝染病ウイルス不活化処理装置の運転実験を開始

大学、民間企業と連携し、外部資金を活用して試作した家畜伝染病のウイルス不活化処理装置がこの度完成し、当センターの池で運転実験を行っています。

ウイルスに感染した野鳥が発見された池、湖沼の水の浄化に今後活躍が期待されています。



運転実験中の家畜伝染病ウイルス不活化処理装置

放牧未経験牛の放牧馴致試験

当センターは、農家の牛を耕作放棄地に放牧する「サポートカウ」事業を推進するため、2農家の放牧経験のない3組(6頭)の牛を用いて、放牧馴致試験を行いました。放牧場の草を食べたことのない農家の牛は、乾草から生草に約3週間かけて徐々に変えて与えることで放牧場の草を食べるようになりました。

放牧馴致の後、福知山市、京丹波町の耕作放棄地に放牧した牛は、放牧場を自由に歩き回り草を食べるなど、センターでの放牧経験が活かされました。

また、放牧した地域の方々からは、「獣害が無くなった」等の感想を得ました。



牛は、電気牧柵に一度触れると怖くて近づきません。
(放牧場を併設した牛舎)



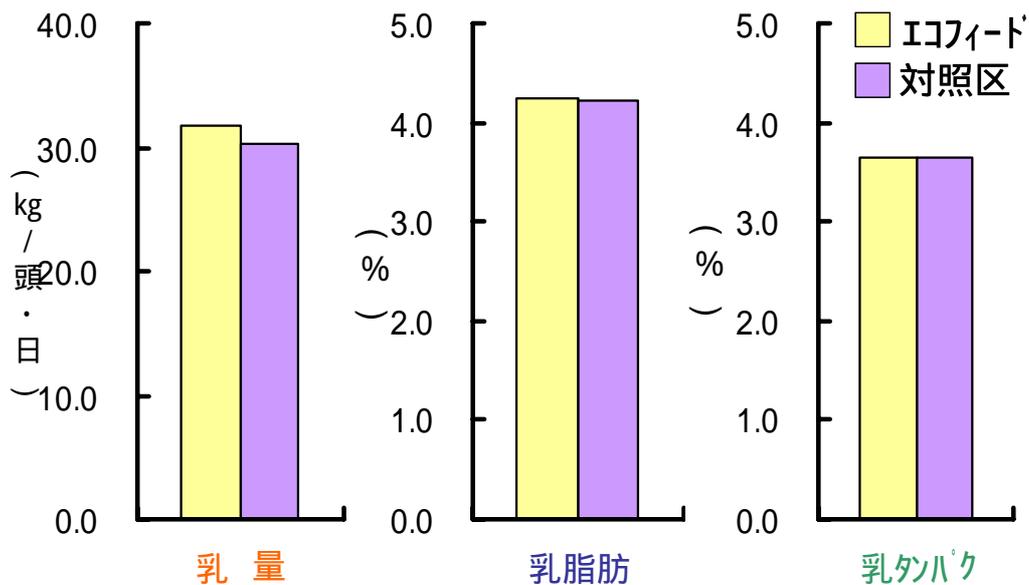
野草の乾燥の度合いを徐々に生草に近づけて試験牛に与えました。

(地域の耕作放棄地を想定した簡易牛舎)

エコフィードを乳牛飼料に利用する技術を確立

エコフィードは、食品製造業や外食産業等から廃棄される食品製造副産物や調理加工残さ等を家畜のえさとして有効活用するリサイクル飼料のことです。

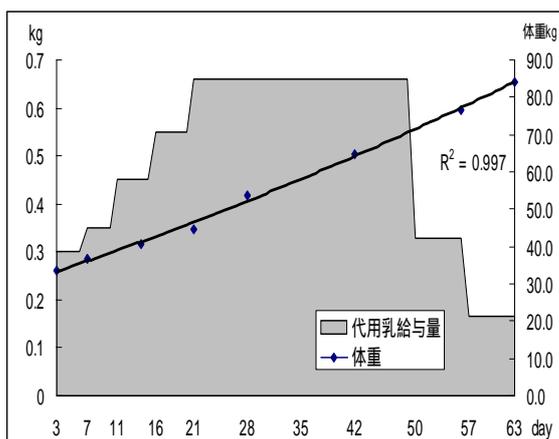
当センターでは、うどんやジャガイモの皮など6種類の食品残さを乾草等と混合し、長期保存できる乳酸発酵技術でサイレージ調製したエコフィードの給与試験を行いました。牛はエコフィードを好み、食べる量が増えたため乳の生産量が増え、乳成分は通常給与しているえさを与えた牛と同様に良好な結果となりました。また、飼料費は、食品残さの価格を0円とすると、牛が生産する生乳1kg当たり2.3円(6.6%)安くなり、有効な技術であることが実証できました。



エコフィード区と通常の飼料区における乳量と乳成分の比較

ホエー代用乳を用いた和牛のほ乳期発育改善

当センターでは、京都大学、近畿5府県、飼料会社と共同で、和牛子牛のほ乳期の発育を改善するため、乳製品製造時の副産物で免疫成分を多く含む「ホエー」を主成分とした代用乳の給与試験を行いました。ホエー代用乳の給与量を最大660gと最大550gの区で、生後3日から7週齢にかけて1日2回給与（温湯で6倍希釈）したところ、最大660g給与した子牛がより良く発育し、体重は1日0.88kg増加しました。この成果をもとにホエー代用乳が商品化されました。



ホエー代用乳給与量と体重の推移
（最大600g 給与区）



1頭ずつホエー代用乳を給与

牛群検定成績（乳質）からみた府内酪農家の現状

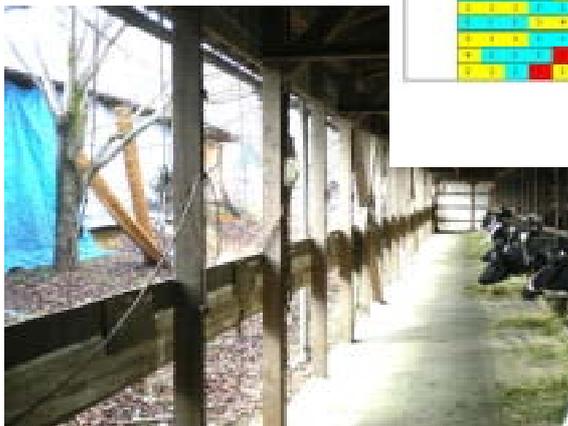
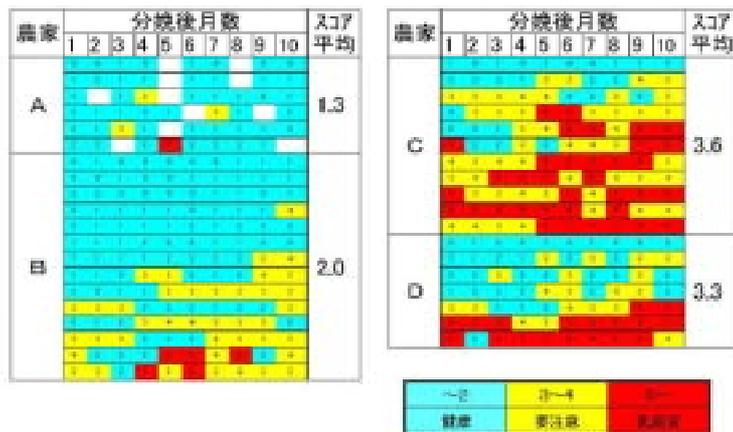
乳牛の職業病とも言える乳房炎の発生傾向を、牛群検定データをもとに乳房炎の発生が多い農家と少ない農家に分け現地調査を行いました。

乳房炎は慢性化しやすい傾向があり、乳房炎の発生が多い農家の牛は、1産目から乳房炎になりやすいことが明らかになりました。

乳房炎の発生が少ない農家では、分娩前から乳房の状態についてきめ細かく観察し、対策がとられていました。

今後、この成果を府内酪農家全体の乳質のレベルアップに活かす計画です。

初産牛の体細胞リニアスコア推移



換気良好の牛舎は乳房炎が少ない

乳房炎罹患の指標として、牛乳中の体細胞（主に白血球）の数をリニアスコア（対数値）化し調査

雪融けとともに雪崩が続発

- 丹後縦貫林道が通行止めに -

碓高原牧場では、今季最深積雪285cm(史上2番目)を記録した2月1日以降、融雪が進むにつれ、当場の周辺道路の5か所で雪崩が発生し、弥栄町に通じる道路は2月19日から全面通行止めになっています。職場では、大きく迂回して通勤する職員を含め全員の帰宅の確認を行ったり、道路管理者からの要請がある度に当場の除雪ロータリで雪崩の処理に協力するなど、安全確保に努めています。



雪崩が起きそうな斜面の亀裂

丹後縦貫林道が通行止めに



雪崩を除雪する当場のロータリ

畜産センター
碓高原牧場

めん羊、山羊が出産を迎えています

碓高原牧場では、この冬は3 m近い積雪を記録するなど厳しい寒さが続きましたが、雪融けとともに、めん羊や山羊たちの出産ラッシュを迎えています。

コリデール・サフォーク(めん羊)、トカラヤギ等が次々と出産し、生まれて間もない仔ヤギたちの「メー」と鳴く声が賑やかになると、いよいよ春が訪れます。



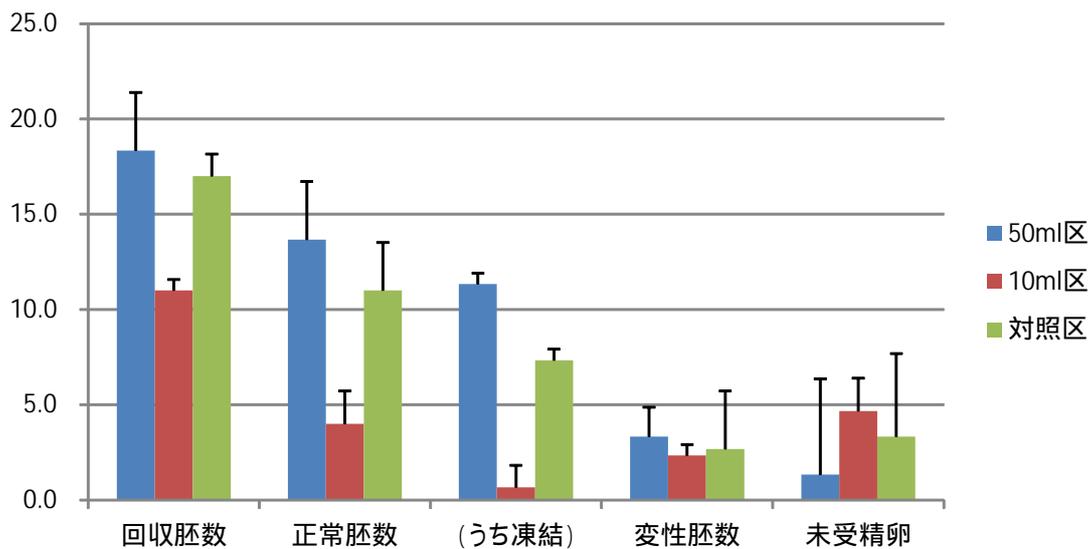
続々と生まれた子どもたち

畜産センター
碓高原牧場

省力的でより多くの受精卵を採取する技術の開発

- 「生理食塩水を溶媒としたF S H製剤1回注射投与方法」 -

牛の過剰排卵処理方法は、F S H（卵胞刺激ホルモン）を6回に分けて投与方法が一般的ですが、F S Hを生理食塩水に溶かして牛に1回投与方法と比較試験を行いました。1回投与方法のうち、50ml投与方法は、回収胚数、正常胚数ともに良好な結果が得られ、投与方法を減らすことによる注射投与方法の簡易化によりその実用性が確認されました。この結果を踏まえ、来年度は「F S H 1回投与方法におけるe C G（妊馬血清性腺刺激ホルモン）投与方法の検討」を行うこととし、さらに効率的な過剰排卵処理方法の開発を目指します。



1回投与方法（50ml区と10ml区）と従来法（対照区）の比較